

地元に戻り、暮らすということ

中越通運株式会社 総務課勤務

三五 麻希

信濃川に架かる萬代橋を背に。御影石を使った六連アーチの橋梁は美しく、新潟市のシンボルとなっている。

大学卒業後、東京で就職。希望の就職先だった。しかし、2年後、東京を離れ、地元新潟で働くことを選択した。地元に戻ると決意するまで、いろいろと悩んだ。でも、今ははっきりと言える。ここでの暮らしは、「より自分らしくいられる」のだと。

さんご まき

1988年新潟県新潟市生まれ。2007年県立新潟江南高校卒、2012年専修大学法学部法律学科卒業後、東京の大手旅行会社に就職。2014年、地元新潟市に戻り、中越通運(株)に就職。大学時代は国際交流サークル、バレーボールサークルに所属。現在はフラダンス、英会話などを習っている。

爽やかな風が吹く。萬代橋が架かる信濃川の川べりを歩く。ときおり散歩やサイクリングを楽しむ人とすれ違う。三五麻希さんは、新潟市内のお気に入りの場所として案内してくれた。夜になると橋はライトアップされ、川辺の広場にはビアガーデンがオープンするという。

ここから JR 新潟駅方面に向かう。ほどなく若者文化の中心地、万代シティに差し掛かる。ファッションブランドのショップが並び、多くの人で賑わう。映画やドラマの舞台としても使われるそうだ。「最近では小栗旬が撮影に来て、すごい人ばかりでした。その前は、福士蒼汰と有村架純の映画の撮影もあったんですよ」。にこやかに、そう話す。

一昨年の春、東京の旅行代理店を退職し、新潟の企業、中越通運に転職した。総務課で各営業所の備

品の管理や、経費の処理など、様々な仕事をしている。悩んだ末の大きな決断だったが、「いまの生活は楽しい」と胸を張る。

たくさんの人との出会いがあった東京

新潟県新潟市で生まれ育った。両親と姉と弟の5人家族。食卓はいつも賑やかだった。自分よりもっと明るい姉、的確なツッコミを入れる弟、家族で一番明るい父、まとめ役の母。そんなふうな家族のことを紹介してくれた。

進学を機に家を出たのは、きょうだいの中でただ一人。専修大学法学部に入学して、一人暮らしが始まった当初は、やはりすごく寂しかったという。だが、それにも次第に慣れ、大学ではバレーボールサークル、国際交流サークルに所属して、思う存分楽し



学生時代、バレーボールサークルの仲間と



学生時代、法学部の友人と日本武道館に桜を見る



卒業式に家永ゼミの仲間と



現在、職場の仲間とビアガーデンで

んだ。

「新潟での生活とは異なり、大学時代は本当に多くの人と出会い、様々な経験をして成長することができました」

だからこそ、「多くの人とかかわる仕事がしたい」と思い、旅行業界、金融業界などを志望した。東京で働くか、地元に戻るかは迷い、どちらの企業も受けた。つらいこともあったが、それでも就職活動を前向きに楽しめたのは、友人や大学の就職課、そして両親がいつも味方してくれたからだ。結局、最初に内定が出た東京の旅行会社に就職を決めた。

「そこは仕事が大変という話も聞いていたので、不安もありましたが、父が『つらくなったらいつでも帰っておいで』と言ってくれたから、就職しよう、頑張ってみようと思えました」

人生において何が大切か

勤務地は新宿本社。最初に配属された部署では、メールマガジンを見た顧客からの問い合わせに対応し、旅行の予約を取るのが仕事だった。

「忙しくて毎日が必死でした。その分、やりがいと達成感がありました。嫌なこと、つらいことと同じくらい嬉しいこともありました」

リピーターから「三五さんにぜひ担当してもらいたい」と指名されたりすると、とても嬉しかった。

1年後に異動した部署での仕事は、ホームページからの問い合わせに対応し、航空券の予約を取るというものだった。忙しさに拍車がかかった。

「就職活動のときにやりたいと思っていた、人とかかわりってこういうことだったのかな」。そんな疑問が湧いてきた。お客さんと信頼関係を築きたいのに、いつしか仕事が流れ作業のようになってるのが悲しかった。そして、自分の人生、仕事だけではないのか、という疑問も感じた。

「その頃、実家の近くに住む姉夫婦に子供ができて、東京にいと家族がどんどん疎遠になるような気がしました。長い休みも実家に帰るか、友達と旅行に行くか、どちらかを選ばなければなりません。それに、東京で一人暮らししていると、お金があまり貯まりませんでした。家族とも一緒に過ごし、時間とお金をもっと有意義に使いたいと思いました」

卒業から2年後の春、新潟市の中越通運に転職し、実家に戻ることを決めた。

自分らしくいられる場所

「出世したいとかはあまりなくて、困ったときに私の顔が浮かぶような存在になりたいと思っています」

周りをサポートする仕事だ。前職よりも自分が求めている人間関係の中で働いているという。

休みの日の過ごし方も、東京にいた頃とはだいぶ違う。友達とドライブして、美味しいものを食べに行ったり、きれいな景色を見に行ったり。街の中心から海も山も近い。この夏は上越の山の向日葵畑に行った。それと、お気に入り、海沿いの瀬波温泉。日本海を眺めながら入るお風呂は、最高の気分なのだとか。

「前職はシフト制だったので、友人と休日も違い、なかなか会うこともできませんでした。東京に住む学生時代の友人とも、新潟に遊びに来てくれたり、私が東京に行ったりして、今の方が会えているくらいです。友人は宝物ですし、これから先も一生付き合っていきたいです」

東京よりも生まれ育ったこの土地の方が、「自分らしくいられる」と三五さん。そして、今そう思っているのも、両親が帰れる場所を作っておいてくれたから。そして、「いつでも帰っておいで」という言葉があったからなのだそうです。